

東海大学付属図書館蔵

『馬内侍集』について

— 紹介と翻刻 —

高橋由記*

一 『馬内侍集』の伝本

馬内侍は中古歌仙三十六人の一人で、『中古歌仙三十六人伝』には「右馬権頭源時明女。一条院皇后女房。立后之時為本宮掌侍」とある。はじめ円融朝に、その後は大斎院選子や一条天皇の中宮定子のもとに女房として出仕した。馬内侍の家集『馬内侍集』は晩年の自撰歌集と思われ、藤原朝光・藤原道隆・藤原道兼・藤原公任といった貴顕との贈答が残されている。

現在のところ『馬内侍集』の伝本は比較的数量も少なく、異本と思われるものもない。歌順もすべて同じである。『私家集伝本書目』に載る八本は福井迪子氏「馬内侍集伝本考」⁽¹⁾によって、また本居宣長記念館蔵

本・岩崎美隆旧蔵本は竹鼻續氏⁽²⁾によって紹介されている。さらに東海大学付属図書館蔵(桃園文庫旧蔵)の二本・宮内庁書陵部蔵の一本を加えると、現段階では以下のように系統分け出来る。

(一) 契沖本系統(二〇九首)

三手文庫本(契沖筆本 辰・二六五)

山口県立図書館本(今井似閑本 九五)

写字台文庫本(龍谷大学図書館蔵 〇二二・五九二)

本居文庫本(東京大学国文学研究室蔵 本居青一〇九・五三〇)

国会図書館本(統群書類従四四九)(国会図書館 彙・二二)

〈二〇一首〉

書陵部統群書類従本(宮内庁書陵部 四五三・二二)(統群書類

従四四九)〈二二一首〉

東海大学付属図書館蔵本(紅梅文庫旧蔵本)(桃二九・六八)

(二) 御所本系統

書陵部御所本(宮内庁書陵部 五〇一・三五)〈二〇五首〉

群書類従本(群書類従二七二)〈二〇三首〉

本居宣長記念館蔵本(重好本)〈二〇九首〉

岩崎美隆旧蔵本(歌数不明)

(三) 抄出本

書陵部水野家旧蔵本(宮内庁書陵部 四〇五・三五)〈五五首〉

東海大学付属図書館蔵本(桃二九・六七)〈二〇〇首〉

伝本は一四番歌「忘れても人に語るな」・一六番歌「人知れず思ふ心の」の二首(以下、歌番号は契沖本系統による)の有無によって分けられる。

(一) 契沖本系統は一四・一六番歌を有する系統で、巻末に勅撰集からの補入がある。国会図書館本までの五本は福井氏が解説・分類されている。

(二) 御所本系統は一四・一六番歌が無い系統で、巻末の補入歌もない。書陵部御所本・群書類従本は福井氏が、本居宣長記念館蔵本(小野田重好書写)・岩崎美隆旧蔵本は竹鼻氏が解説・分類された。

(三) は抄出本で、水野家旧蔵本は福井氏が解説されている。

東海大学付属図書館蔵の『馬内侍集』は、卷子本(桃二九・六七)と冊子本(桃二九・六八)の二本ある。いずれも桃園文庫旧蔵で、冊子本はさらに紅梅文庫旧蔵である。そこで以下では便宜的に卷子本を東海大学卷子本、冊子本を東海大学冊子本(紅梅文庫旧蔵本)と呼ぶことにする。両者とも『馬内侍集』の伝本としては興味深いものであり、今回、東海大学付属図書館の許可を得て、東海大学卷子本の翻刻をした。また、同じく抄出本である宮内庁書陵部蔵本(四〇五・三五。以下、水野家旧蔵本)も宮内庁書陵部の許可を得て、翻刻した。

東海大学冊子本(紅梅文庫旧蔵本)

東海大学冊子本(紅梅文庫旧蔵本)は、二七・六センチ×一九・九センチ、袋綴、紙表紙、二七丁、一〇行(二六ウのみ一行)。「馬内侍集」という家集名の下に「三十」と番号が記されている。一オには「紅梅文庫」の蔵書印があり、内題に続き「喜昌勅物右馬権守時明云々」、さらに朱で「大和権守時明女/一条院皇后宮女房/朱書成章本」とある。また朱・青の書入がある。

東海大学冊子本(紅梅文庫旧蔵本)は、東大国文研蔵本居文庫本(以下、本居文庫本)・龍谷大学図書館蔵写字台文庫本(以下、写字台文庫本)と行数、字詰、書入が似ており、本居文庫本と写字台文庫本の共通異文も東海大学冊子本(紅梅文庫旧蔵本)と一致する。一五四番歌の詞書・歌が朱による補入であることも三本共通である。行数は三本ともに一面一〇行だが、二六ウのみ東海大学冊子本(紅梅文庫旧蔵本)と本居文庫本が一面一一行になっている。内題の下に書かれたもののうち、「喜昌勅物右馬権守時明云々」以外は本居文庫本と、「朱書成章本」以外は写字台文庫本と同じである(写字台文庫本は「喜昌勅物右馬権守時明云々」も朱書)。東海大学冊子本(紅梅文庫旧蔵本)が、本居文庫本や写字台文庫本と近い関係にあることは明らかである。

写字台文庫本『馬内侍集』は『四十人集』のうちの一冊である。『馬内侍集』には奥書はないが、『大江千里集』など十あまりの家集には書写奥書があり、それによると安永八年(一七七九)と同十年、天明二年(一七八二)と同五年に書写・校合されたことが知られ、書写者は小沢蘆庵と親交のあった澄月や蘆庵の門人たちであり、書写後に蘆庵が朱で校合・訂正を行っていることもわかる⁽³⁾。蘆庵の手を経た写本は小沢蘆庵本といわれているが、蘆庵本には歌合や私家集などの歌書が多くあり、井上宗雄氏が発見された今治市の河野記念文化館蔵の『私家集』(三四六・八三九)三十四冊も蘆庵本で、紅梅文庫の蔵書印があるという。また、大取一馬氏が発見・翻刻された新日吉神社蔵の蘆庵筆「写本家集目録」及び藤島宗順筆「写本家集目録」(享和元年写)により、谷山茂氏蔵紅梅文庫旧蔵の目録「百家集」が蘆庵本の目録であることが判明した。三種の蘆庵本の目録には家集ごとにそれぞれ一〇八十あまりまでの番号が付されており、所蔵の有無をあらわす印がある。そして「谷

山本目録の番号と、今治本「私家集」の各家集に付した番号とは全て一致しているが、その番号も、この蘆庵本が紅梅文庫に入ってから新たに付されたものではなく、その原形は蘆庵自筆の目録に付されていた番号であったことが明らかとなった。大取氏は目録に記された家集の現存状況も一覧にされたが、『馬内侍集』は写字台文庫にあるのみで、今治本・京大本・新日吉神宮本にはない。

谷山本目録にある『馬内侍集』の番号は「三十」とあり、東海大学冊子本（紅梅文庫旧蔵本）に付された番号と同じである。東海大学冊子本が紅梅文庫旧蔵であることを考えあわせると、同じく紅梅文庫旧蔵の今治本「私家集」（三十四冊）と一連のものである可能性はきわめて高い。

次に本居文庫本との関係であるが、東海大学冊子本（紅梅文庫旧蔵本）と本居文庫本は母字までもが酷似している。本居文庫本と写字台文庫本は母字は異なるところもある（写字台文庫本の方が、簡略な字を使っている）のに対して、東海大学冊子本（紅梅文庫旧蔵本）と本居文庫本は母字もほぼ同じである。本居文庫本の独自異文は、「つ」と「へ」（六七番歌）、「ね」と「ぬ」（一三九番歌）など、単なる誤写として説明できるものが多いが、一方で東海大学冊子本（紅梅文庫旧蔵本）の存在を介することによって誤写の過程を説明できるものもある。例えば、一九番歌詞書「おとりたるをとこ柳にふみをさしておこせたれば（傍線筆者）」の「おこせ」は、本居文庫本では「そせ」となっている。東海大学冊子本（紅梅文庫旧蔵本）では「於こせ」と書かれており、「於こ」の二字が本居文庫本では「楚せ（そせ）」となったと思われる。写字台文庫本はほぼ現在の平仮名と同じ「おこせ」と書かれているので、写字台文庫本と比べても本居文庫本の写し間違いは説明できない。東海大学冊子本（紅梅文庫旧蔵本）と本居文庫本とが共通の親本をもとに写され

たものなのか、東海大学冊子本（紅梅文庫旧蔵本）が本居文庫本の親本なのかは判らないが、両者が非常に近い関係にあることは間違いない。最後に、福井氏が「単なる誤写及び直接的な誤写とは考え難いもの」として述べられた写字台文庫本と本居文庫本の異同と、東海大学冊子本（紅梅文庫旧蔵本）を比べておく。

	写字台文庫本	本居文庫本	東海大学冊子本（紅梅文庫旧蔵本）
5	あくかれぬらし	あくかれなまし	あくかれなまし
36 コ	其文に	其冬	其冬
49	たもとは野へなれや	我身は野なれはや	我身は野なれはや *右側のミセケチは朱
63	さつき山	さつき志	さつき山
143 コ	思へることよみて ^と	思へることと	思へること ^{よみて} と
188	ゆくへも	夕も	ゆくへ ^は 夕も *ミセケチ・傍書は青
198 コ	たのこひのはこに	たのこひのこも	たのこひのこに ^は *傍書は青

東海大学巻子本

東海大学巻子本は、基本的には詞書のない抄出本である。紙高二八・五センチ、字高二三・〇センチで、天地に一本の界線がある。和歌は三行または二行書。すべての歌に朱の合点がある。題箋に「世尊寺行成卿真蹟」、巻末には「右一卷世尊寺行成卿／真蹟疑無之者也／光広（花押）」と識語がある。

行成筆とあるものの書写期は江戸中期と思われる、識語も烏丸光広筆とは思われない。ただ字体はかなり古いので、おそらく古い時代（平安末か鎌倉初期）に書かれた卷子本があり、それに光広が識語を書き、さらにその卷子本全体（本文と識語）を江戸中期になって写したのが東海大学卷子本と考えることができようかと思う。光広が識語を書いた行成筆卷子本が江戸中期まで存在した可能性はあるが、現在所在不明である。

伝行成筆本に関しては、既に福井迪子氏が、写字台文庫本六五番歌結句「色かはりゆく」に「るまで」の校異及び「権跡」の注記のあることから「伝行成筆の馬内侍集何か何かが存したことを記しとどめたもの」と言及しておられるが、その存在が確かめられたといえよう。ただし「権跡」の注記が伝行成筆卷子本を指すのか、東海大学卷子本を指すのかは不明である。なお、六五番歌結句は「色かはるまで」となっている写本の方が多く、「色かはりゆく」とあるのは、御所本・本居文庫本・写字台文庫本・東海大学冊子本（紅梅文庫旧蔵本）の四本（いずれも傍に「るまで」の注記がある）だけである。また写字台文庫本と同じ「権跡」の注記は東海大学冊子本（紅梅文庫旧蔵本）にもある。

抄出本としては既に水野家旧蔵本が知られている。水野家旧蔵本も卷子本で、五・六・七・八・九・一〇・一一・一二・一四・一五・一六・一七・一八・一九・二〇・二二・二三・二六・二七・二八・三〇・三三・三四・三五・三六・三九・四〇・四二・四三・四四・四七・四八・五一・五三・五五・五六・五七・五九・六一・六二・六五・六六・六七・六八・六九・七〇・七一・七二・七三・七四・七五・七八・七九・八〇・一四二、の計五五首である。東海大学卷子本は一四二を除く五四首が水野家旧蔵本と一致し、さらに一・二・三・四・四九・八一・八三・八四・八五・八六・八七・八九・九〇・九一・九二・九三・九四・

九五・九六・九七・九九・一〇〇・一〇二・一〇四・一〇六・一〇八・一一〇・一一一・一一二・一一三・一一六・一一八・一一九・一二〇・一二一・一二二・一二三・一四一・一四三・一四六・一五五・一五七・一五九・一六六・一六七・一七三の四六首を加えた、合計一〇〇首である。

水野家旧蔵本は江戸期写ながら字体が古く、平安末、鎌倉極初期に書写された親本を忠実に透写しているとされる。東海大学卷子本も字体が古く、「て（天）」「く（九）」「東（と）」などは水野家旧蔵本と同じく漢字の形をあまりくずさずに使用していることが多い。そこで東海大学卷子本は水野家旧蔵本と近い関係にあるのではないかと疑ったが、両者は共通異文もあるものの、歌句に異同もあり、字詰・行替の違いからみても、直接の親子・兄弟関係は想定しにくい。

ところで、東海大学卷子本を考察する上で興味深いのが『弘文荘待賈古書目』二四号（一九五四・六）に紹介された「異本馬内侍集」である。『弘文荘待賈古書目』には以下のように説明されている。

108 異本馬内侍集 伝藤原行成筆 江戸中期頃写 一卷 四五〇〇円

紙高二八、五糎、鳥の子紙。天地に一本の界線、その間に一首三行づつに書写してゐる。巻末に、「右一卷世尊寺行成卿真蹟疑無之者也、光広（花押）」とある。江戸時代中期頃の臨写であらう。書体奇古、類似の古写本を知らない。

本文は流布本と別系統のものだと覚しく、所収の和歌百五首の内、百一首は流布本の中にあるが、四首は全く流布本中にもないものである。古くからかゝる系統の古写本も伝つたものであらう。

東海大学卷子本と異本馬内侍集は、紙高・奥書が一致している。歌数に違いがあるものの（東海大学卷子本は一〇〇首。異本馬内侍集は一〇五首とある）、それもある程度は説明できる。東海大学卷子本は一〇〇首だが、連歌一首（家集四九番歌）が含まれており、これを一首ではなく二首と数えたならば「百一首は流布本の中にある」とする説明に合う。ただし「四首は全く流布本中にない」とする異本歌は東海大学卷子本には見えない。異本歌の有無に疑問が残るとはいえ、紙高・奥書・字体を考えると、東海大学卷子本と異本馬内侍集は同一の本なのではなからうか。

東海大学卷子本の書誌については、出光美術館学芸員・別府節子氏、宮内庁書陵部・杉本まゆ子氏のご教示を仰いだ。

注

- (1) 福井迪子氏「馬内侍集伝本考」『校本馬内侍集と総索引』笠間書院 一九七二・七 所収。以下、福井氏の御論はこれによる。
- (2) 竹鼻積氏『馬内侍集注釈』の解説（貴重本刊行会 一九九八・七 所収）
- (3) 家郷隆文氏「まえがき」『龍谷大学善本叢書 一八 四十人集』思文閣 一九九八・三
- (4) 久曾神昇氏「王朝私家集伝本書目（一）」（四）『書誌学』九巻五号（六号、十巻一号）二号 一九三七・一一、一二、一九三八・一、二二）、同「平安時代歌合伝本書目（一）」（四）『書誌学』十巻三号（六号 一九三八・三（五）、井上宗雄氏「小沢蘆庵本歌合集・私家集について——今治本歌合集を中心に——」『和歌史研究会会報』六五号 一九七七・一二）、同「小沢蘆庵本歌合集について（補遺）」『和歌史研究会会報』六八号 一九七八・一二）、大取一馬氏「蘆庵本の歌書等について」『龍谷大学論集』四二三号 一九八三・一〇）

二 翻刻

【凡例】

- ① 東海大学付属図書館蔵本（桃二九・六七。東海大学卷子本）を上段に、宮内庁書陵部蔵水野家旧蔵本（四〇五・三五）を下段に配し、翻刻した。
- ② 用字は通行の字体により、改行・傍記等は底本のままとした。
- ③ 歌頭には契沖本系統（新編国歌大観・私家集大成と同じ）による歌番号を付した。
- ④ 判読不能なものは「□」とした。
- ⑤ 歌末の文字を傍書している場合は「/」で区切った。
- ⑥ 紙継ぎ位置（水野家旧蔵本では、親本の紙継ぎ位置）は「……」で示した。

翻刻のご許可をいただきました東海大学付属図書館、宮内庁書陵部に厚く御礼申し上げます。

東海大学卷子本 (題箋) 世尊寺行成卿真蹟	水野家旧蔵本 (木札) 馬内侍集
1 さかりありてちらまじいか にをしましこゝろのとけきは るの花かな	(ナシ)
2 ちらしとやたのめそめけむ はかなくもとまらぬ花にそふ	(ナシ)

<p>こゝろかな</p> <p>3 おもひあまりたのめしなかのくやしきはこのよとたにもちきらさりしよ</p> <p>4 しかすかにかなしきものはよのなかをうきたつほとこのこゝろなりけり</p> <p>5 君かことおもはぬ人のつらからはわれもこゝろはあくかれなまし</p> <p>6 あふことのなきさなればやみやことりかきりてあともたえてとひこぬ</p> <p>7 とはぬまはそてくちぬへしかすならぬみよりあまれるなみたこほれて</p> <p>8 あふことはこれやかきりのたひならむくさのまくらもしもかれにけり</p> <p>9 たのめくる君しつらくはよもの海にみもなけつへきこゝちこそすれ</p> <p>11 あふことのとゝこほるまはいかばかりみにさへしみてなけくとかし</p> <p>12 いのりくるわかゝたおかのちかことをおそくたゝすのかみに</p>	<p>(ナシ)</p> <p>(ナシ)</p> <p>(ナシ)</p>
<p>5 きみかことおもはぬひとのつらからはわれもこゝろはあくかれなまし</p> <p>6 あふことのなきさなればやみやことりかきりてあともたえてとひこぬ</p> <p>7 とはぬまはそてくちぬへしかすならぬみよりあまれるなみたこほれて</p> <p>8 あふことはこれやかきりのたひならむくさのまくらもしもかれにけり</p> <p>9 たのめくる君しつらくはよものうみにみもなけつへきこゝちこそすれ</p> <p>11 あふことのとゝこほるまはいかばかりみにさへしみてなけくとかし</p> <p>12 いのりくるわかゝたをかのかことおそくたゝすのかにもある／かな</p>	<p>もあるかな</p> <p>14 わすれても人にかたるなうたゝねのゆめみてのちもなかくらしよ</p> <p>15 いのちあらはさりとものみたのみたるあきまちつけむこゝちこそせね</p> <p>16 人しれすおもふこゝろのしるければゆふともとけよ君かしたひも</p> <p>17 もえいつるむねのけふりはたかけれとなみたのかはゝなのおこほりけり</p> <p>18 かきくもれしくるとならはかみなつきけしきそらなる人やとまと</p> <p>19 みそかにもあるへきものおゆきふるにたものうるふつきのわひしき</p> <p>20 いろ／＼の花のなかにも女郎花いかなるゑたにつゆとまるらむ</p> <p>21 つらからはさてもやみなて春のひのうら見まほしきあまにもあるかな</p> <p>23 ひとつまつむすひけりともいまそしるとくるこゝろはときはならしを</p>
<p>18 かきくもれしくるとならはかみなつきけしきそらなる人やとまと</p> <p>19 みそかにもあるへきものをゆきふるにたものうるふつきのわひしき</p> <p>20 いろ／＼の花の中にも女郎花いかなるゑたにつゆとまるらむ</p> <p>21 つらからはさてもやみなて春のひのうら見まほしきあまにもあるかな</p> <p>23 ひとつまつむすひけりともいまそしるとくるこゝろはときはならしを</p>	<p>14 わすれてもひとにかたるなうたゝねのゆめみてのちもなかくらしよ</p> <p>15 いのちあらはさりとものみたのみたるあきまちつけむこゝちこそせね</p> <p>16 人しれすおもふこゝろのしるければゆふともとけよ君かしたひも</p> <p>17 もえいつるむねのけふりはたかけれとなみたのかはゝなのおこほりけり</p> <p>18 かきくもれしくるとならはかみなつきけしきそらなる人やとまと</p> <p>19 みそかにもあるへきものをゆきふるにたものうるふつきのわひしき</p> <p>20 いろ／＼の花の中にも女郎花いかなるゑたにつゆとまるらむ</p> <p>21 つらからはさてもやみなて春のひのうら見まほしきあまにもあるかな</p> <p>23 ひとつまつむすひけりともいまそしるとくるこゝろはときはならしを</p>

東海大学付属図書館蔵『馬内侍集』について

高橋由記

26 いとしくぬれのみまさるころもてに
あめふることおなに、かくらむ
27 くもてさえかきたえにけりさ、
かにのいのちをいまはなに、かけ
まし
28 なけきつゝふれともかすにあらぬ
みはいかゝはすへきしつのをた
まき
30 わすれなほこしちのゆきのあと
たえてきゆるためしになりぬ
はかりそ
33 なにかそのつゆのほたしにあらぬ
みもきまとまるへきこのよな
らねは
34 ふれはかつきえぬるゆきとしり
なからなにやまさとのしいて
こひしき
35 人こゝろまたらにみゆるくさな
れはかれぬひとのしるし
なるへし
36 あたにはとたのみし風しあら
からはさかりもなくて花や
ちりなむ
39 わすられぬうきにつけてもあ
やめくさいかにしたねなかくら

26 いとしくぬれのみまさるころも
てにあめふることをなに、かくらむ
27 くもてさえかきたえにけりさ、
かにのいのちをいまはなに、かけまし
28 なけきつゝふれともかすにあらぬ
みはいかゝはすへきしつのをた
まき
30 わすれなほこしちのゆきのあとた
えてきゆるためしになりぬはかりそ
33 なにかそのつゆのほたしにあらぬ
みも君とまるへきこのよならねは
34 ふれはかつきえぬるゆきとしり
なからなにやまさとのしいてこひ
しき
35 人こゝろまたらにみゆるくさなれ
はかれぬるひとのしるしなるへし
36 あたにはとたのみし風しあらか
らはさかりもなくてはなやちるらむ
39 わすられぬうきにつけてもあやめ
くさいかにしたねのなかくらめやは

めやは
40 くるしとていろにいつれはあさえけ
りそめてくやしきはなおみ
るかな
41 とふかたそまつしられけるほと
ときすいかになくねそあまや
とりせて
42 しりそめしことやくやしき
しのふくさしるひもなし
たえやしなまし
43 おもひつゝぬるよのゆめをしらぬ
みはむねにたくこひさめたにも
せよ
44 のとかなるはるのうらにもす
かためはなおこゆるきのいそか
しやなそ
47 おもほえすなみたの川にぬれき
ぬをわれよりほかにたれか
きるへき
48 ふくかせにけになひかすは女郎花
しのひにたえるつゆをしらなむ
とあれは
49 さかのいろなるこゝろとやきく
といひしかは
49 おみなへしつゝむわかみはのへ

40 くるしとていろにいつれはあさえけ
りそめてくやしき花を見るかな
41 とふかたそまつしられけるほと、
きすいかになくねそあまやとりせて
42 しりそめしことやくやしきしの
ふくさしるひもなしたえやし
なまし
43 おもひつゝぬるよのゆめをしらぬ
みはむねにたくこひさめたにも
せよ
44 のとかなる^{ナル}春のうらにもすかため
はなをこゆるきのいそかしやなそ
47 おもほえすなみたのかはにぬれき
ぬをわれよりほかにたれかきる
へき
48 ふくかせにけになひかすはおみな
へししのひにたえるつゆをしら
なむ
(ナシ)
(ナシ)
(ナシ)

なれや
 51 きくのうへのつゆをおきて
 なみたゝにわたのころもそて
 もかはかぬ
 53 なきなたつそてもありしを
 きりくすくさつゆけしと
 なにかなくらむ
 55 さみたれのそらくもりする
 ほとゝきすときになくねは
 ひとともかめす
 56 ほのみえしつきをこひつゝかへ
 るさのくもちのなみにぬれし
 そてかな
 57 しかのうらにたのむなみたはつ
 きせねとせきもとゝめぬあふさ
 かのせき
 59 しらつゆのす□くこゆるあふさ
 かのいとほる□□にそてそぬ
 れける
 61 あふことおけふとなかけそかさゝき
 のよしきくたにもゆゝしきも
 のを
 62 なかれゆくことのはにこそしら
 つゆのいのちをかけておきかへ□
 つれ
 65 ものおもふあきはふかくそなり

51 きくのうへにつゆをおきてなみ
 たゝにわたのころもそてもかは
 かね
 53 なきなたつそてもありしをき
 りくすくさつゆけしとなになけ
 くらむ
 55 さみたれのそらくもりするほと
 ときすときになくねはひととも
 とかめす
 56 ほのみえしつきをこひつゝかへるさ
 のくもちのなみにぬれしそて／かな
 そてかな
 57 しかのうらにたのむなみた
 はつきせねとせきもとゝめぬ
 あふさかのせき
 59 しらつゆのすえくこゆるあふさか
 のいとほるさめにそてそぬれける
 のを
 61 あふことをけふとなかけそかさゝ
 きのよしきくたにもゆゝしきも
 のを
 62 なかれゆくことのはにこそしらつ
 ゆのいのちをかけておきかへりつれ
 つれ
 65 ものおもふあきはふかくそなりに

にけりのきのしのふのいろかは
 るまて
 66 こゝろみにそらにかよひてほとゝ
 きす人たのめなるねこそなかるれ
 67 けさみれはとまれるやともなかりけ
 りしのふのくさもいかゝなりにし
 68 くさまくらたひねのまくらかは
 かすはゆめにもつけむおもひをこせよ
 69 ひとりぬるやとにふすふるかやり
 ひのさよふかたにもえかはり
 つゝ
 70 あふことはからなてしこのはる
 けておもひわすらふとこ
 なつのはな
 71 いせきするいはまの水のうちし
 のひしのひかねてそねはなかれ
 ぬる
 72 いか□□やしらぬにおふるうきぬ
 なはくるしやこゝろ人しれすのみ
 73 うきくさのまくらやすらむおし
 とりのよるはのとけきいやはねら
 るゝ
 74 わかこひにくらへてしかなあめふ

けるのきのしのいろかはるまて
 66 こゝろみにそらにかよひてほとゝ
 きすひとたのめなるねこそな
 かるれ
 67 けさみれはとまれるやともなかり
 けりしのふのくさもいかゝなり
 にし
 68 くさまくらたひねのこゝろかはら
 すはゆめにもつけむおもひを
 こせよ
 69 ひとりぬるやとにふすふるかや
 りひのさよふかたにもえかは
 りつゝ
 70 あふことはからなてしこのはる
 けておもひわすらふとこな
 つの花
 71 いせきするいはまのみつのうち
 しのひしのひかねてそねは
 なかれぬる
 72 いかなれはしらぬにおふるうき
 なはくるしやひとめ人しれすのみ
 73 うきくさにまくらやすらむお
 しとりのよるはのとけきいやは
 ねらるゝ
 74 わかこひにくらへてしかなあめふ

れはにはのうたかたかすをかそへて

れはにはのうたかたかすをかそへて

75 ねさめにはきゝもしつらむよす

75 ねさめにはきゝもしつらむあめ

からあめのごゑにはをとりにやは

ふれはよすからをとりにや

する

する

78 をのゝをとまたつねさりせはたに

78 をのゝおともたつねさりせははま

つはきいはひのつゑをいかてし

つはきいはひのつゑをいかてし

らまし

らまし

79 しもかれのあふくなけきのゑたな

79 しもかれのあふくなけきのゑたな

れはふかきいろとはみえすそあり

なれはふかきいろとはみえすそ

ける

ありける

80 ちはやふるかもやしろのかみもき

80 ちはやふるかもやしろのかみも

け君わすれすはわれもわれもわす

きけ君わすれすはわれもわすれし

れし

81 うりふやまそのほとゝのみた

(ナシ)

のめつゝひさしくなるはつらき

わさかな

83 ほとゝきすしのふるものをかし

(ナシ)

はきのもりてもこゑのきこえける

かな

84 さはにみなおりたちぬともはを

(ナシ)

わかみわかゝりそめしよとのあや

めは

85 あやめくさいつれのさわにねをとめ

(ナシ)

てみをはなかめにくたしはつらむ

86 つゆとけておもひもをかしものゆ

(ナシ)

へにしたにこかれてなにかしのふる

87 つれなくともかした葉におく

つゆはいかゝとまれるものとかはしる

89 なかそらにかくてやたゆるさゝかに

のいとあさましきこゝろなりけり

90 たのめをきてきみこぬやとの風の

おとはよるとなれはそはけしかりける

91 よもすからたこのうらなみよせし

をとをふしのたかねにきかさ

りけるよ

92 おこし火のすみをははひにかく

しつゝうつまぬなのみ□□を

こそおもへ

93 かしはきはあめもひとめも

しけしとてみかさのやまにふ

みかよふとか

94 ゆきかよふあとたえぬるかみつ

くきのなかれてとかや人のたの

めし

95 つきくさのうつしこゝろやいかなら

むむらゝしくもなりかへるかな

96 おほい河人めもらさぬけふやさは

そまのいかたしくれをまつらむ

97 うらことにあまはみるらむはつ

春のけぬるきかせになみ□なこ／まむ

99 かりにてもこゝろをかへてみまし

(ナシ)

116	ひとしれすねられぬとこのさ しも	(ナシ)	118	ひしさをたれとぬるよのゆめ にみつらむ	(ナシ)
113	あさひさすくさのゝもとにいゑい してすはへするひはことにな し	(ナシ)	119	ふくかせになひくとやきくあを やきのいとあさましくおもひよ る	(ナシ)
112	かすかのにたれかまつとはつけつら むけふのねのひにうくひす のなく	(ナシ)	120	わかれてははるにこそまたなりにけ れとしはたかくそとくまさり ける	(ナシ)
111	こちかせにこのみしるくてたち はなのたのめしことのすきぬ めるかな	(ナシ)	121	おもひきやはるのなかめのゝとけ きに君をくもるにならむものゝとは	(ナシ)
110	人こゝろよしみつしほのいまよ りはわれつらくともたこのうら／波	(ナシ)	122	しのふれはそらになみたもきり みちてこひしき人やいとこなるら／む	(ナシ)
108	ほとゝきすわするらむこそう のはなのかけとそふへきわれと しらすや	(ナシ)	123	きみをのみまつむしのねのあ るものおいつれのゝへのつゆにぬるら／む	(ナシ)
106	むめのはなむかしのことをうた かへとそらのけしきのかはれる やなそ	(ナシ)	141	はるは花あきほもみちとさそはれ て人もたちよるころもてのもり	(ナシ)
104	きりふかくなくしゝをみよかり ふのゝけにかりもりのこゝろなりけ／む	(ナシ)	142	君かよをかめのおなしにみすとて やかわへのほたるひかりますらむ	(ナシ)
100	おはすてのつきはいかにかいてた りしなとさめかたき人はみるらむ	(ナシ)	143	ねさめしてたれかきくらむ	(ナシ)
102	もろともにあふともなくてあふ さかのせきのまに／＼花をみにけむ	(ナシ)	146	うつろふはしたははかりとみしほと にやかてあきにもなりにけるかな	(ナシ)
100	おはすてのつきはいかにかいてた りしなとさめかたき人はみるらむ	(ナシ)	155	こよひ君いかなるさとのつきを	(ナシ)

<p>みてみやこにたれをおもひいつらむ 157 うかりけるみのうのうらのうつ せかいむなしきなのみたつはきくつや 159 さゝのはにあられふるよのさむけき にひとりねなむものやはおもゆ 166 こゝろのみそらになりつるほとと きす人のめなるねこそなかるれ 167 君しもあれみちのゆきをさた むらむすきぬる人はかつわすれつゝ 173 する人にほひなかけそむめのはな むかしのこともいかてしのはむ</p>	<p>(ナシ) (ナシ) (ナシ) (ナシ) (ナシ) (ナシ)</p>
<p>右一卷世尊寺行成卿 真蹟疑無之者也</p> <p>光広(花押)</p>	